

フィンランドの王様の思い出

大串尚代

英米文学専攻に進級されたみなさん、こんにちは。現在、2年生のみなさんは毎週木曜日の「米文学史Ⅰ」の授業で、わたしの声だけ聞いて下さっていると思います。

さて、これまでの先生方がこのオンライン・ガイダンスで本塾の英米文学専攻で学ぶことの意義や心構えをお話してくださいましたので、わたしは、自分が2年生に進級した時の話をすることにいたします。

わたしが専攻振分で英米文学専攻を第一志望で提出したとき(ちなみに第二志望は仏文学、第三志望は独文学でした)、英米文学専攻では、選考試験が課せられていました。わたしの記憶が確かであれば、当時は多い年で150名を超える志望者がいたため、選考試験で人数を絞っていたのです。

実は選考試験についてはあまり記憶がありません。1月だったか、2月だったかに、日吉の大教室に集められました。試験時間がどれくらいだったかも覚えていませんが、おそらく1時間か1時間半だったと思います。試験監督に先生のどなたがいらっしゃったかも、いままったく覚えていないので、おそらくものすごく緊張していたのだと思います。

問題と解答用紙が配られて度肝を抜かれました。というのも、問題というのは、いきなりとある短編小説を読み、その要約を書け、というものだったからです。聞いたこともない作家の名前です。その作品そのものも全然知りません。

もちろん辞書の持ち込みは不可で、初見で短篇を読んで、ただちにその要約をまとめなければいけません。そう、松田隆美先生が西脇順三郎先生のお言葉を引用されていましたが、「英文科に入って、英語が出来るようになりたいなどと言うのはだめだ、出来る学生が入ってくるのが英文科です」という言葉通り、「英語が出来る」かどうかを試されていたのです(怖)。

しかもその短編小説というのが、長さはそれほどではないのですが、とても不思議な内容で、つかみどころのない作品でした。アメリカが舞台ではあるのですが、ヨーロッパからやって来た「なんとかスキー」という名前の女性が不審な行動をとり、どうやら嘘についてい

るようで、語り手がその嘘を暴こうとするのですが、結局その嘘をよしとしてしまう。しかしその後、語り手は不思議な光景を目にする、という物語です。

はっきりいって、そのときわたしは全然物語の内容がわかりませんでした。ただ、「フィンランドの王様が櫓に乗っていた」というその女性が言ったことがきっかけとなって、嘘があげられる、ということしかわからなかったのです。わたしは要約になにを書いたのでしょうか。それほどたくさんは書けなかったような気がしています。あのときはどの先生が採点されたのでしょうか。わたしの答案を採点した先生方は、溜息をついていたかも知れません。

はたして、わたしはその後無事に英米文学専攻に進級しました。おそらくその年は志望者が例年より少なかったのでしょうか。都合のよいときだけ過去を振り返らないタイプのわたしは、選考試験で出された短編小説のことなど、タイトルも作者もすっかり忘れていました——フィンランドの王様が出てきた変な話、という以外には。

数年後、わたしが修士課程に進んだ頃でしょうか。わたしはとある作家の作品を読んできました。それは Carson McCullers という作家の *The Ballad of the Sad Café* という奇妙に歪んだ愛の物語でした（すごくよい小説。ぜひ読んで）。その作品はそれほど長い作品ではないので、そのペーパーバックにはその他の短編小説が収録されいました。それを読み進めていたとき、あっと思いました。

あったのです、フィンランドの王様の物語が。

それが “Madame Zilensky and the King of Finland” という短篇でした（「なんとかスキー」はジレンスキーだった）。わたしは急いで読み始めました。わかるわかる。すごくよくわかる。そして相変わらず奇妙な短篇でした。奇妙で魅力的な短篇でした。

わたしは慶應の英米文学専攻で学ぶ間に、かなりの英語読解力が身についていたようです。そのおかげで、フィンランドの王様の物語に再会することができました。もちろん、受身でぼけーっとしているだけでは英語の力は身につくことはありませんが、英米文学専攻の授業の課題をしっかりとこなし、卒論を書くうちに、みなさんもきっと英語の力を（程度の差こそあれ）身につけることでしょう。そのときに開かれる世界を楽しみにしていただきたいと思っています。

そしてこのたび、あのときの（おそらくひどい点数の）選考試験の罪滅ぼしとして（あるいはリベンジとして？）[“Madame Zilensky and the King of Finland”](#)を全訳してみました。お

時間があるときにどうぞお楽しみ下されば幸いです。

ちなみに、英米文学専攻の選考試験を受けたのは、わたしの代が最後になりました。

さて、次は高橋勇先生からのお言葉を楽しみにいたしましょう。